

京都大学	博士(文学)	氏名	金 澤 雄 介
論文題目	サルデーニャ語動詞形態論の通時的研究		
(論文内容の要旨) サルデーニャ語は、イタリア共和国のサルデーニャ島で話されるロマンス諸語のひとつである。本論文では、サルデーニャ語動詞形態論の通時的变化、すなわちラテン語から現代サルデーニャ語に至るまでに、動詞がどのような変化をこうむったかという問題について論じた。議論にあたっては、サルデーニャ語の2大方言であるログドーロ方言とカンピダーノ方言の間に見られる共通点と相違点に着目し、それらが生じた過程を明らかにすることに主眼を置いた。以下では、章ごとの概要を述べる。 序章に続く第2章では、サルデーニャ語の諸特徴について述べた。まずサルデーニャ語の方言区分を地図とともに示し、ログドーロ方言とカンピダーノ方言をはじめとするサルデーニャ語諸方言の概観をおこなった。次に、サルデーニャ語は他のロマンス諸語と比較して、保守的な性質を持つことを具体例とともに示した。そして、保守的な性質を持つに至った歴史的背景を示すため、サルデーニャ語史の概観をおこなった。加えて、本論文で扱う3つの古サルデーニャ語文献、Condaghe di San Pietro di Silki、Condaghe di San Nicola di Trullas、Carte Volgari の諸特徴について概説した。 第3章では、動詞形態論の通時的研究を行うための基盤となる、サルデーニャ語通時音韻論の概観をおこなった。母音については、サルデーニャ語は基本的にラテン語の母音の質を保存していることを具体例とともに示した。他にも、語末音節高母音化、語末添加母音、母音連続の前部要素 i、u の半母音化など、母音に見られる諸現象について述べた。子音については、閉鎖音、摩擦音、共鳴音など、いくつかの自然類に分けてそれぞれの通時的变化について示した。母音および子音変化の概観にあたっては、ログドーロ方言とカンピダーノ方言に見られる差異が明確に示されるよう配慮した。また、カンピダーノ方言における、前舌母音が後続する軟口蓋音の口蓋音化が生じた時期および要因について、先行研究の記述を踏まえて本研究の見方を提示した。 第4章では、ラテン語の4種類の動詞活用タイプはサルデーニャ語で3種類になったことを踏まえた上で、不定詞の通時的变化について論じた。考察の結果、サルデーニャ語の第2変化動詞の不定詞は、前次末音節アクセント、すなわちラテン語の第Ⅲ変化動詞のアクセント位置を継承していることを示した。その根拠として、前次末音節の母音が弱化によって i になっている語尾 -iri を挙げた。また、第2変化動詞における語根末子音の重子音化は、直前のアクセントのある母音が持つ、声帯の緊張を指定する素性 [+stiff vocal folds] の波及によって生じたと主張した。さらに、現代カンピダー			

ノ方言の不定詞の形成過程に関して、母音間の r の消失が生じたという Viridis(1978) の主張の妥当性を示した。

第 5 章では現在時制の通時的変化について論じた。5.1 節では直説法現在の通時的変化について論じた。ここでは、第 2 変化動詞の直説法現在語尾は一般的にラテン語の第 II 変化動詞の語尾を継承しているが、古サルデーニャ語では第 III 変化動詞に由来する語尾も僅かながら残存していることを具体例とともに示した。また、ログドローロ方言の 2 人称複数語尾は、アクセント位置については第 II 変化動詞の要素を、母音の音色については第 III 変化動詞の要素を継承しており、カンピダーノ方言の 2 人称複数語尾は第 II 変化動詞のみに由来することを主張した。

5.2 節では接続法現在の通時的変化について論じた。ここでは、ラテン語の第 II・第 III・第 IV 変化動詞の接続法現在語尾の合流には 3 つの要因があることを示した。すなわち、第 II 変化動詞の語尾に含まれるヨッド *i の、語根末子音を口蓋音化した上での消失、あるいは dʒ への変化によって語根の一部と解釈されるようになったこと、そして第 IV 変化動詞の語尾に含まれるヨッドの消失である。また、現代ログドローロ方言の第 2・第 3 変化動詞の 2 人称複数 -ādes に含まれる語末音節母音 e は、対応する直説法現在 -iðes からの類推によると推定した。また同様の類推によって e を得た第 1 変化動詞の 2 人称複数 *-éðas では、直前の é からの異化によって -éðas になった。加えて、いくつかの動詞の接続法現在に見られる語根母音 ε は、dāri ‘give’ の直説法現在と接続法現在の間に見られる母音の交替 a ~ ε からの比例的類推によって得られたと主張した。

5.3 節では、語根の直後にヨッドが後続する形式の通時的変化について、語根末子音の種類ごとに示した。一例を示すと、語根末子音 n とヨッドの連続 *nĭ が ŋg になるという現象は、カンピダーノ方言内部の変化によるものであることを、本来的に語根末に g を持つ動詞におけるパラダイムの一般化と、それにとまなう ndʒ (<*nĭ) におけるハイパーコレクションによって説明した。

第 6 章では半過去時制について論じた。6.1 節では、直説法半過去の通時的変化について論じた。考察の結果、主に次のことを主張した：(1) 古カンピダーノ方言の第 1 変化動詞に見られる同一母音の連続 <aa> は、ヌーオロ方言に見られる並行例を根拠として、母音縮約が生じる前の段階を反映していると考えられることを示した。(2) 古ログドローロ方言の第 2 変化動詞では、類推による母音間の b の消失によって生じた二次的な母音連続 ea は、異化によって ia になることから、“類推による母音間の b の消失 → 異化 ea > ia” という規則の順序を提案した。一方、古カンピダーノ方言の第 2 変化動詞では、二次的な母音連続 ea に異化が生じないことから、“異化 ea > ia → 規則的な音変化による母音間の b の消失” という規則の順序を提案した。(3) 古カンピダーノ方言の第 2 変化動詞における母音連続 ea に含まれる a の消失は、添加母音によって条件付けられていることを示し、添加母音が基底形に組み込まれていると主張した。その

根拠として、添加母音の音色が a であること、すなわち添加母音は ea に含まれる a が消失する前に付加されたことを挙げた。(4)現代ログドーロ方言の第1変化動詞の1・2人称複数では、対応する直説法現在との合流を避けるため、第2・第3変化動詞からの類推によって ia を含む語尾になった。その後、ia がすべての人称に一般化された。

(5) 現代カンピダーノ方言の第2・第3変化動詞では、単数形と3人称複数については第3変化動詞に由来する語尾が一般化され、1・2人称複数では第2変化動詞に由来する語尾が一般化されている。

6.2節では接続法半過去の通時的変化について論じた。この節では、ログドーロ方言の第2変化動詞はラテン語の第Ⅱ変化動詞のアクセント位置を継承している一方、古カンピダーノ方言の第2変化動詞は第Ⅲ変化動詞のアクセント位置を継承していることを示した。また、現代カンピダーノ方言の接続法半過去がイタリア語トスカーナ方言からの影響によって形成されたことについて、混交というモデルを用いることでより具体的に示した。

7章では完了時制について論じた。7.1節では、すべての人称で語尾にアクセントを持つ弱変化タイプの完了の通時的変化について論じた。議論の結果、古カンピダーノ方言の第1変化動詞の1人称単数 -ei と3人称単数 -edi は、dari ‘give’ の完了 dei と dedi からの類推によって得られたことを示した。また、古サルデーニャ語では母音連続の縮約による語末音節アクセントは許容されないという制約に基づき、古ログドーロ方言の第3変化動詞語尾では、一度消失した母音間の唇音が u 完了からの類推によって復元されたと主張した。一方古カンピダーノ方言では母音間の v の消失にともなう母音連続 ii の保存によって、語末音節アクセントを回避していることを示した。

7.2節では、いくつかの人称で語根にアクセントがある強変化タイプ(s完了、u完了、母音交替完了、重複完了)の通時的変化について論じた。とりわけ、u完了には3通りの変化が観察されることを示し、それぞれの変化に対して Syllable Contact Law の観点から説明を与えた。完了の形成法に移行が見られる動詞については、その移行パターンを分類し、それぞれの移行の要因について考察を行った。その結果、母音交替完了と重複完了は失われ、s完了およびu完了にとって代わられる傾向にあることが明らかとなった。この事実、s完了とu完了は完了を顕著に特徴付ける機能を持っていた一方、母音交替完了と重複完了は、音韻的な要因も重なって、完了形を標示する機能を失いつつあったことを示唆するものといえる。弱変化タイプから強変化タイプに移行した動詞の例に関しては、ラテン語の第Ⅱ変化動詞と第Ⅲ変化動詞に由来する動詞は強変化タイプの完了を持つという一般的性質に従って、二次的に強変化タイプの完了を得たと推定した。一方強変化タイプから弱変化タイプへの移行については、弱変化タイプの数的優位性によるものと主張した。

7.3節では直説法大過去の通時的変化について論じた。それぞれの動詞は、対応する完了と同様の変化が観察されることを示した。

第8章ではその他の動詞活用形の通時的変化について扱った。8.1節では命令法の通時的変化について論じ、以下の結論を得た。(1) 現代ログドーロ方言の第2変化動詞の2人称複数 *-iðe* は対応する直説法現在と同様、アクセント位置についてはラテン語の第II変化動詞、初頭母音については第III変化動詞の要素を継承している。(2) 現代カンピダーノ方言の命令法には、直説法現在と並行的な変化が観察される。すなわち、第2変化動詞の2人称複数 はラテン語の第II変化動詞の語尾を継承しており、第3変化動詞の2人称複数では第2変化動詞からの類推が生じている。

8.2節では過去分詞の通時的変化について論じた。ここでは、過去分詞における対応する完了からの影響について、とりわけ *u* 完了に含まれる重子音と *f* の類推が複数の動詞に観察されることを、類推が生じるまでの過程とともに示した。また、強変化タイプの過去分詞には、*i* 過去分詞に移行する例が頻繁に観察されることから、*i* 過去分詞は *t* 過去分詞および *s* 過去分詞と比較して、過去分詞を顕著に特徴付ける機能を持っていたと推定した。

8.3節では動名詞の通時的変化について論じた。古ログドーロ方言の動名詞語尾に含まれる語末母音 *e* は、現在分詞との混交によって得られたという見解を支持する根拠として、古ログドーロ方言では動名詞と現在分詞に機能の重複が観察されることを挙げた。また、古カンピダーノ方言の動名詞語尾はラテン語の形式を受け継いでいるが、現代カンピダーノ方言では、ログドーロ方言と同様、現在分詞との混交に基づく形式が一般化されていることを示した。

第9章では、2つの不規則動詞について扱った。9.1節では *āere/āi* ‘have’ の通時的変化について論じた。ここでは、直説法現在1人称単数と接続法現在に見られる重子音 *pp* は、対応する完了からの類推によって得られたという先行研究の主張を、イタリア語古シエナ方言にも同様の類推が観察されることを示すことで支持した。また、条件法の助動詞として用いられる完了における重子音 *pp* の消失および語頭母音の弱化は、文法化にともなう音韻的縮約に起因するものと主張した。

9.2節では、コピュラ動詞 *éssere/éssi* ‘be’ の通時的変化について論じた。直説法現在におけるパラダイム内の類推、不定詞と接続法現在に見られる第2変化動詞からの類推は、他のロマンス諸語にも観察される。従ってこのような類推は俗ラテン語における比較的古い段階、すなわちサルデーニャ語が俗ラテン語から分岐する以前に生じていたといえる。また、現代ログドーロ方言の完了では、母音連続 *ui* に含まれる *i* が消失した一方、ヌーオロ方言では *u* が消失した。この事実から、ログドーロ方言ではラテン語のアクセント位置が保存され、ヌーオロ方言ではアクセント移動が生じたと推定した。

第10章では結論として、本論文の総括と今後の展望について述べた。

(論文審査の結果の要旨)

サルデーニャ語は、イタリア共和国サルデーニャ島で使用されている言語であり、島の中央部および北部のログドーロ方言と南部のカンピダーノ方言に大別される。ラテン語に遡るロマンス諸語のひとつであり、歴史的文献記録として重要なものは11世紀から14世紀にかけて修道院で作成されたコンダーゲ (condaghe) と呼ばれる公文書である。論者は、カリアリ大学での10ヶ月の留学期間を含めた4回にわたる現地滞在を通して、これらの古サルデーニャ語文献の写本を分析するとともに、フィールドワークによって現代語の調査を行った。本論文は、これらの現地調査によって収集した資料に基づいて、ラテン語から現代サルデーニャ語ログドーロ方言とカンピダーノ方言にいたる動詞形態論の歴史を解明しようとする試みである。

本論文ではまずラテン語から現代サルデーニャ語への推移のさまざまな段階、すなわちラテン語から古ログドーロ方言、古ログドーロ方言から現代ログドーロ方言、ラテン語から古カンピダーノ方言、古カンピダーノ方言から現代カンピダーノ方言という4つの異なる時期に生じた音変化が概観されている。もとより史的形態論研究の前提として、音変化についての理解が必須であることはいうまでもない。古ログドーロ方言と古カンピダーノ方言のあいだにはすでに方言的差異がみられるために、うへの4つの時期に生じた音変化についての正確な理解は、続く6つの章でなされる動詞形態論の史的分析に対して信頼できる基盤を与えている。

サルデーニャ語動詞形態論の変化を扱った研究としてはWagnerやBlasco Ferrerの研究があるが、本論文では先行研究にはみられない方法が取り入れられている。ひとつは、論者自身が作成した古サルデーニャ語文献のデータベースの使用である。データベースを用いることによって、文献資料に現れる個々の動詞形式を網羅的に扱うことが可能になり、それによってこれまで断片的にしか考察されることのなかった動詞の通時的変化に関して、より実証的で包括的な研究を行うことが可能になっている。もうひとつは近年の理論言語学の成果を取り込むことによって、種々の現象に対してより広い視点から説明を与えている点である。

重要な分析例のひとつとして、古サルデーニャ語第2変化動詞の不定詞、たとえば *tenne* ‘to have’ (<tenēre) や *ponne* ‘to donate’ (<pōnere) にみられる重子音化の問題がある(サルデーニャ語第2変化動詞ではラテン語の第2と第3変化動詞が融合している)。Guarnerio はこれらの不定詞の語根末重子音が対応する完了形からの類推であると考えている。しかしながらうへの *tenne* に対応する完了形 *tenni* (<*tenūi < tenuī) は重子音を持つが、*ponne* に対応する完了形 *posi* (<*posūi < posuī) は重子音を欠いている。したがって Guarnerio の主張は妥当ではない。これに対して論者は、重子音化が語根末子音の直前にアクセントを持つ第2変化動詞の不定詞に限られていることに注目する。アクセントのある母音は高いピッチで実現するために声帯の強い緊張をとまって調音される。また重子音は単子音に比べて閉鎖時

間が長く、より多くのエネルギーを必要とする。近年の音韻理論では、一方でピッチの高低の区別を、他方で子音の長さの区別を行うために、[stiff vocal folds](声帯の緊張度)という弁別素性が用いられている。したがって、不定詞の語根末重子音はアクセントのある直前の母音が持つ[+stiff vocal folds]という素性が後続子音に波及した結果ととらえることができる。

古サルデーニャ語の u 完了の通時的変化に関しても、新たな理論的な視点からの分析が施されている。u によって特徴づけられるラテン語の完了形は、古サルデーニャ語において類型的に3つのタイプに分けられる。まず tennit ‘had’ (<tenuit) のように、u が直前の子音に同化するタイプがある。つぎに uoluit /bolbit/ ‘wanted’ (<voluit) のように、u が b に変化するタイプがある。もうひとつは posit ‘donated’ (<posuit) のように、u が消失するタイプである。これらの3つのタイプは、一見したところ互いに無関係な別個の変化をこうむったように見える。しかしながら、「音節末音 A と音節頭音 B からなる AB という連続において、B の共鳴度が A の共鳴度より低いか、あるいは同じである音節構造が好まれる」という制約を遵守している点でこの3つの変化には共通点がある。つまり、いずれのタイプにおいてもラテン語の第2音節の頭音 u は第1音節の末音よりも共鳴度が高かったために、ten.uit(. は音節境界を表す)では先行子音への同化により tennit になったのに対して、vol.uit では共鳴度の低い閉鎖音 /b/ を持つ uoluit /bolbit/ になった。これに対して pos.uit では u が消失した結果 po.sit となり、音節末音 s が音節頭音の位置に移っている。このように制約の遵守という観点に立つならば、違った変化に対して統一的な説明を与えることができる。

以上の例に代表されるように、本論文では先行研究とは異なる分析結果やこれまで報告されていなかった新たな知見が数多く提出されており、優れた研究として評価することができる。しかし問題がまったくないわけではない。ラテン語から古サルデーニャ語ログドロー方言とカンピダーノ方言にいたるまでの動詞体系の変化については包括的な分析がなされているが、現代ログドロー方言と現代カンピダーノ方言にいたるまでの変化については決して十分とはいえない。その大きな理由は、14世紀以降のアラゴン王国とスペイン王国の支配により、資料的に空白の時期が生じていることによると考えられるが、ヌーオロ方言やオリアストラ方言などの下位方言をも対象にした比較言語学的方法によって、言語史がより正確に復元されることが将来期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお2010年2月4日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。